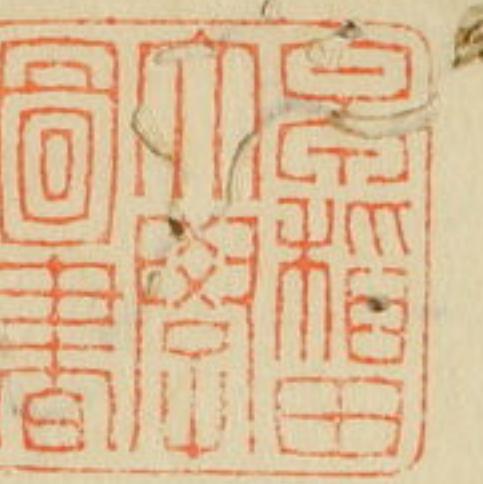




1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

15
508
62



五角一ノりりもへ

○巨勢^{コセ}力金若^{カナワカ} 大納言仁明帝の時の人也

清冷殿の繪と書く

金高^{キンコウ}

金若子

金村相覧

公忠

公氏

相續

して

繪と能

セリ

紀金固^{コナガタ}

法名曰深朝日阿闍梨と称す

緩急の妙手

賢真^{ヒツジン}

と称す

狩野岡^{カニワカ}

佛像の妙手後冷泉帝の時の人也

右云何せその名ありて益々すうて其名近づかずとも
さればさうより仕作盡印章辨^{シヤウ}王集とぞりてりす
多く妙人^{ミツヒト}或人曰土佐と云益工代あり其祖又ハ名
め何否^{カニ}これ權中納言長良卿の裔皇大皇宮大進為絆
法名寂起の子^{スル}京大夫隆信^{ヒサシキ}上野守^{ヒタチノミコト}隆信の子
大原に住ス^{タマツ}信実其子隆經^{ヒサシキ}市門院の其子隆親代と繪と能^クせり
隆親の子中勢少輔備前^{ヒタチノミコト}行習繪所に補^{シテ}其子

古佐守行庵又繪所外一
代古佐と云ふ稱号とも今又古佐と
之は必ず書かどゆうにあり
琢磨の法眼宗可雲田口
法眼隆元吉法眼復度_名
廣近_也又云古佐の庵流す
名あ傳焉

。為相伊勢妙見の注とて古象の秘もあり甚に曰三河國
に首ひて元川とす。貧乏の老翁ハ一村落子として之
喜事にうそへす。下より列いかれ、彼子の歳に五歳
橋と八所にけたるにより八橋と云ふと

伊勢 ゆゑと 楠木 に水引のすてられへまゝと
ナリ て せるに うへて うへ 稲と うへ
ソを ゆゑの 徒は 度長十五年の 背中ノ院中納言
源通勝卿源通素然 印行の 内国書と がく入
奥書秘也足使 と かくアホ、 徒古よりの 徒に あぢや彼等の身

鷺とて、けふすてりの高とて、乃て、橋板八枚と
曲木せす。はうりてとは、今御殿の、下橋の川乃て、く
あ新いあり。下ゆき橋と八脚にてして、往來のたや
をまかにそげよや

古の川姓にありとて、す停す
住むと、鷺の因みるに、川の流
一條まで、すてり水も
えぐれ、を、豪熊をの構
川の、も、ひてたと、印、めざりよや

中院家の木我母晴岳院尼公李吉卿の女也のまこと
徳野井大納言

藤野大作

。我公少が人のよきも例えのいふ事もつまぬ
そぞとからぐる割せりの内役の半弓はも人と見
ゆセウマアム物見るに寄合うてはまのうめ、
ひまくそくハ馬と弓と弓の面に共隊足式
をひの板揮と定め爲とや其化許家は
ウ故寛化の多くにルキモ今时家分立す
軍役人役のりえとばむドも勿々しまり
あらや又分立れ無具さ御て人に衍ひ名宣の
もともとあしわくても太平日久一氣ハ是

昔に國を守り事ありと毛丸の家に生きて
軍役を第一に奉仕する者ばかりのことをよく見る
忠義を極める又何の因縁せば連軍のちり
こりびやうとして又ヨリいと不用へかん
武人の文あぐ一あぬ花火と申しておもて
仰けり、ワカクシおもへまい仰けり

。春井郡山田郷幡村古城ハ越智右馬允信高麗城
と云或人は是尾張の林氏の祖也と云

同郡庄同村名村古城ハ幡野と云人所ほゆれ

右馬久子也トス或人曰林伏渡守信勝ハ孫久子タクシ
トシ作トシマツ同郡トコ布津村雲興寺制れハ織田
富房守秀後及信長之織田信重等所居也前
ひ軍頭種公前内大臣伝雄公トシヨウ東照神君即
代々朱章と號トシメ三面斧ミヤマハ石一斗

三佐中野忠吉の御制ミサキノウニ井下河イシダカワ

○春日井郡枇杷鴻橋長サ百十一間東大橋亭の
間西ノ橋元和八年モリタニ材民に掃除の料と號トシメ蓋
三十枚也トシメ此時新榜と爲トシメ改治井文助河野兵助

高田忠義永田清高等至て下小早村内古堤
古道を改て為科地トス橋の内東早石枇杷井村
民掃除トシメ西安向モリタニ下小早村の民掃除して

寛文二年モリタニ城南牛本松の路市井と聞キテ

此時刑罰の場と更井取氣野トシメ

同立歲已尾改修と北の方移トシメ舊處の源改め

同七年モリタニ小牧驛市井と號トシメ毎年四月

○本列春日井郡山田村布津村金陶の窯也モリタニ
瀬戸村に十石ありて磁器と焼石而當化トシメ祖母

懷の石六當所の内あり。國禁ありて令に仰され、
えとど不得又青僧青身の僧也。此地に產も多す。

男邪アマヤ。海シマと多岐タチに比シテ。又苏アマツ。

木村隼人正氏高

性平家式。権守先祖今川家臣也。

尾外一色村住人村門以有。本村名為稱号ト。
又有大崎村處流コラス大崎。

大村隼人正效ハ美答木村常陸分高宗

仕豊臣家

大崎左兵衛

效ハ大文字

大崎玄蕃允一宗

初父左衛門仕福鳴
正則子玄孫有紀列

大崎半丘衛門

大崎与左衛門高城

女子千賀志摩守信親妻

大崎半四郎高一

仕福鳴
正則

○或人問 文照院殿の内寔母初日蓮宗より葬一
まつをうれいか 常憲公比年に傍て东嶽山に
改葬あり。准后の名而法名とあくふ授まらず。也
かく其法諱如何と尋ね。台家の俗よどと
ゆて靈會日鑑記より長昌院殿贈從一位天正
台光大姉寛文四年甲辰。由改葬のおり始佐佐比興
あり。越智氏のゆゑいこうと左春癸巳二月六日生
五十四の内法金二万部の内讀絆あり。是レ
文昭公涉遺令と云々

○馬の一歳うと馬音二歳うと駒音三歳
うと駒音四歳うと駒音

阿濕婆アシラバハ馬の梵語うりらこして馬と産む

所をぬし其中立アタマ中アタマ後アフタの大日アマニにあらまと良馬と
セ一 大抵西北方に産む者と勝アツトヒ東南方に
産む者と劣弱アラカクとて我國ハ東北方産す者と
良とて極アリにりう西北の地ハ寒に東南へ暖
き我國東方の國寒多アラカクニケル爲分を圓に生
ムアリ (アリ)

○牡駒北馬に交りて生む子を駢アシラバと云牡馬の駒に交りて
生むと駢駒アシラバと云牛に交りて生むと駢駒アシラバ音也
と云牡牛駒に交りて生むと駢驥アシラバ是等れ
類アソシ御國アメニ不聞

○羅矣集二十尾張中納言義俊と云是ハ元和三年
己亥のことを有利の字の漢文也致之れ
内事アシラバ

○尾侯引兩アシラバ幕及白旗アシラバ使アシラバをうふこれを
慶長九年アシラバ駿府にて致之授アシラバセラレト

○南明院殿 光空 玉大姫

豈臣秀士ノ妹婿ニ太神君ニ天正九年庚寅正月十四日薨
葬清東福寺中南明院

○弘治 正月十四日
二年丙辰家康公駿府にて以元板徳川治郎
三郎源元義と号す。初、閑口刑部少輔親長
女おとめのうりくおとめ 築小殿おとめと号す。親也ハ今川
母堂おとめ天正七年八月廿日故ありて遇害。

○清須合戦記

足利將軍尊氏天下兵馬ノ権ヲ執ラレケニ頂
其氏族斯波高経尾張國ツブタタケ領ス
足利尾張守
家氏ノ孫アリ

号玉泉
寺殿ト
其子治部ノ大輔義将洛ノ二條勘解由
小路氏衛陳居ス役テ武衛家ト称ス其子
從三位左兵衛督義重其子右兵衛督義淳其
弟從三位義卿其子治部大輔義健に至伏
尾張越前兩國ノ守護に補セラル越前ハ
甲斐氏ノ下シ尾張へハ織田家シ遣シテ守
護代トセラレケニ長祿四年義健卒シテ嗣
ナシ其族大野終理太夫が子義敏ヲ継嗣ト
エス波尼兵衛佐ト祐久然ニ家老甲斐朝

倉穢田等カ徒義敏ト不合ヒテ廢シ之澁川左
兵衛佐義紀ガ子義廉ヲ迎ヘテ斯波シ家督
トス是ヨリ義敏義廉互ニ争テ乱ヲ発シ洛
中物忽ナリシ應仁元年二月義廉管領ニ補
セラル然ニ山名細川が凶亂免リテ義廉
山名宗全ニ与ス是ヨリ天下大ニ乱シテ合戰
止時ナシ文明五年宗全及細川勝元死シテ
京師軍ノ統ル大將十カリシカトモ丙黨猶
對陳シテ相聞ア同九年十一月諸軍各京シ

玄テ自領ノ國々ニ飯山義廉於此尾張國清
須城ニ入レリ其子左兵衛督義良其子治部
大輔義達ト称ス永正十一年八月大河内備
中守貞綱ガ援兵トシテ遠江四へ進發三列
間城ニ籠ラレシカ御下軍破シ降ソ乞テ
飯山セリ歎ハ久
氏親也是ソリ成裏ハ其子義統ニ
家督ソ讓テ大永元年卒セラニ義統治部大
輔ニ位セリサレトモ家凡裏ヘテ家老穢田
大和守入通常祐其弟因幡守監國政ヲ執

リ常祐天文ノ初ニ死シテ其養子秀五郎信
友家ノ續ケル天文二十三年ノ頃義統ノ家
人築曰弥攻右衛門某名古野弥五郎ト謀
織田信長ニ申道シテ秀五郎ヲ誅セントス
義統モ守護ハ名ノミニシテ秀五郎專ニ
逆威ヲ振フ事ノ恩シ信長ト内急シ合セラレ
シトカヤ築田石古野先主トシテ信長ノ
兵士七百餘騎ト共ニ清須城ヲ攻レサレトモ
秀五郎カ人數強クシテ城ヲ拔ニ^{ヨリ}颶ナク

一旦和ヲ講シ軍ハ散レケリ義統ハ本丸
ニ居玉テ面ハ秀五郎ソ接ル体ナリケレバ
信長ト内通ノ事アレハ秀五郎終ニ六殺サ
シナニト凡聞アリケリ同年七月廿日義
統ノ若君堀江ノ辺ヘ河将ニ出テラシ家人
過半供シケレハ秀五郎能特分ト思ニ已カ
衆人織田三位房坂井大膳亮河尻左馬助河
原兵助等ニ示シ合セ急ニ本丸ヘ取カケテ
攻ケル森刑部少輔政武同掃部助丹羽左近

柄植宗元同明善阿弥等内外ニ走リ回テ敵
數多討取其身モ各戦死ス賊徒猶重リテ攻
寄シカハ館ニ火ノ掛義統ヲ始旧丸ノ臣一
族三千餘人一同ニ賤カキ切リテ矢ニキナ
餘代相續ノ高家一時ニ亡ニラレケルニヨソ
悲シケレ若君岩龍丸ハ河边ニテ此ヲ聞直
二名古屋へ遁レテ信長ノ賴レケレハ先
天王坊ニ入レヒラセラル其弟君ハ生捕
ニナラレシガトカクシテコレ元名古屋

遁テレシ去程ニ信長亥五郎が逆惡ヲ声シ
勢ヲ集テ同七月十八日清須ヘ押シ寄ラル先
手ハ柴田督六勝家足輕頭ニハ安孫右京進
忠頼藤江藤藏太田入助木村源五郎芝崎孫
三郎山田七郎立郎天野佐左衛門等許多ノ
兵士我先ニト追ミケリ城矣ハ山王口ヘ嵒
張テ禦キ鬪シカ究竟ニ名古屋勢ニ追マク
テレ四方へ敗北シ或ハ追討ル、者殺百人
ナリシ乞食村誓願寺前ニ湘文ヘテ防キケ

ル賊モ終ニ進立テシテ一同ニ城ニニケ入
城ノ兵討レシ者ニハ河尻右馬允織田三位
房雜賀修理道原源左衛門尉安食九郎兵衛
ハ牧平四郎高北傳次古沢七郎左衛門尉等
ヲ初八十餘人ナリ御方義理ノ下合戰ナリ
ケレハ誰^クヤハ残ルヘキ武衛恩顧ノ諸侍面
モフラス攻撃^{シテ}ル其申ニ由宇亥市トテ義
統サレモ寵愛ノ童生年十七歳ナリシカ
謀叛ノ張本三位房ノチ取^シル頼テ本城ヲモ

攻^スルヘカリシニ緒川ノ城主水野氏ヲ駿
列金川家^{今川}攻^スレ、由聞ヘシカハ大兵ヲ國
境ヘ入^ルハ天事ナリト信長思察アリ
テ一マツ外^シリ^ト有藤山城入道シ頼名古屋ノ
留主ヲ請給ヘリ天文二十三年正月有藤力
家人安藤伊賀守ヲ大将トシテ田宮甲山安
齊熊沢物販等都合一千餘人ノ兵士名古屋
ニ到着セリ同二十日志賀田惣ノ西卿陳
トラセ翌日頃テ信長ハ堺川エ出馬アリテ

村木ノ城ヲ攻取駿列勢ヲ追ハライ給ニテ陞陳
アリケル同二月清須ノ家老坂井大膳和ヲ
乞織田孫三郎信光ノ城へ移シ彦五郎ト西
守護代ト仰クヘシト申ケレハ信長ハ宸儀
アリテ和腔ニソ成リニケル同四月十九日
信光清須へ移リ入南丸ニ居セラル翌二十
日大膳カ兄坂井大炊助ノ城中ニシテ誅セ
ラレシガハ大膳ハ城ノ落テニケ去リケル
彦五郎モ叶ハシトヤ思ヒケン近習五六輩

ヲ召連紛出ニト支度ニケル間ニ兼テ相房
ノ狼煙ヲ揚ラレケレハ信長頓テ出馬アル
名古屋勢我先ニト清須へ馳來リテ本城ヲ
取巻頻ニ攻撃ケレハ彦五郎近臣でテ討セ
獨身トナリ密ニ城ヲヌケ出神羽前燒残リ
ニ在家ノ屋上ヨリ逃ニトシケルシ天野佐
左衛門鑓ヲ以突落ス森三左衛門頓テヲ
サヘテ首ヲ取ニケル先祖代ミノ主君ヲ赦
セし天罰ナリ諸人ニコソニセヨトテ御城

川ノ端ニ者ヲ掛レシトカヤ斯テ信長ハ
清須ノ城ニ移リ義統ノ若君岩籠殿元販
ナサシメ武衛治部大輔義銀^{式ハ右兵佐}ト称
シ本丸ニ居マヒラセ尾張屋形トテ崇敬ア
リケリ永祿四年三月ノ吉良屋砍義安ト
會盟ノ儀シナサシメ一万ニ筋目シタシ給ニシ
ニ今川家吉良ノ尾列ヘ屬セシシ憤リ軍
ヲ催吉良シ攻シカハ義安出奔シテ清須ヘ
來リテ客食セリ同年當國戸田庄ノ高家石

橋左馬ノ頭義忠河内城販部左京亮ニ与シテ
武衛吉良ニ内通シ信長ニ叛逆ス此事露顕
アリシ種^程ニ信長腹立有テ恩知ラスノ恩人
トモナレハ一々首ヲ刎ヘケレニサスカ家
ノ主弟又ハ由アハ高家ノ景ナレハ余ハカ
リヲ助ケルソトテ武衛吉良石橋三人ヲ三
方へ追放タレケル足利家ノ裔近幸高家ノ
人々モ甚微々ナリシカ此ニ至リテニ一家一
時ニ浪人トナラシケル石橋ハ販部ヲ頼テ

長鳴へ隠し吉良ハ駕列へ下リ今川ノ家入
ナル武衛モ石橋ト同長鳴へ遁シラレ
シニ幾程ナク落城セシカハ伊勢へ遁シ河
列ニ漂泊シ薙髪シテニ粉軒ト称セシ元龜
ノ頃畠山昭高ニ依様々罪ヲ謝セラレシ
カハハ地ソ授ラレシトキヨヘシ義銀ノ弟
義永ハ或義冬三列中山庄ニ隠居ラシカ後ニ織
田信雄ニ仕ヘテ津川玄蕃先ト称セシ同年
或書曰玄蕃ノ名右衛門仇合道諱ヘトスノアリトス
ノ秋信長上洛シ將軍家義輝公ヘ參勤ア

遂尾張守護職ヲ并セラ是ヨリ尾張ヲハ一圓
ニ進止アリケルソ目出度アリケル

又津川改太郎ニ者アリ是三松軒伯父トニ

○尾張國ハ斯波の領ナテ織田氏守護代ニ居
住セリハシテ之の時ナラ始リテ曰其始末詳梅

ニ應永の頃吉賀和美作入道建照ニシイ者日代
のやにス但ニ元永三十六年六月織田在近宮記又社務管領
吉賀和入道トナリハ社奉と領ナリヤアリ

又千秋内通改奥範ト國勢ニ預リト召セヒ是野
田殿ト稱シテ契田大官司職ナビ時分まで織田氏

尾列ヨ右リモ又ノ竹也

國府文百證文
多に織田氏に

承
亨の序
久義氏

本列に末佐政平、又武衛家の古ト知ゆ、爰ニ曰

尾張四美北卿事早往
御教書元旨可否久太七

伏見殿南御方雜掌
之由也仍舊達如伴

十月七日
元丙年
入道力

城田三郎名ハ敏定後大和守ト稱セしニシ蓋本列
守護代ヲ以て來往セリ予孫長く本費ト移シテ本
列東ノ居セリ又之傳大承三年の以ニ城田大和守

遼勝一作連勝 天文廿二年の比ニ、御田大和守勝秀ミタケ
人有リ名古屋法華寺の證文シテ ト
大永三年七月十六日
天文二十一年九月十五日謹定
さりとせ儀因系書ニハ達勝勝秀アノシテ
亦教本同矣一文久クヒ

敏田食子
 ○ 敏定 大和守
 敏信 左馬助
 信定 彈正志
 信宗 右馬助
 永政 右馬助
 永勝 備後守
 信長 伊勢守

○濃別喬藤山城入道道之始、京の油賣矣。——濃別任

來、土岐の家老永井友徳方へ出入道といひ其を圍
うべとす。やがて後にハ土岐のれ姫と曰く之へ京ち
尋き、やと伴い土岐殿に仕しり、久つての石兵が
かにうてあくの令補を務めし。一々として若ら
と裁いて其領とうといふと土岐殿也にひれて之が
もありしも自永井太郎の尉と稱し、次第に竊盜
にて駆に云波家と亡一、赤坂城守の辺とづいて
又、赤坂城守と名乗る者にて京うち召し下れ姫に
ましセーやとて此書と云ふ。ひ女姫の遺腹の男子と生

ヤリと城守で、子とも足赤坂源部大輔義範う
そは享よテ、生元年次強御と称え、赤坂子ハ冥
みゆく所ハ幼の行也とあり、後半あくにこゝな義範
も良父とぞいに或者はけて曰是ハ土岐殿の内子
ゆうゆうのためて、赤坂主と云ふてしまふ。而れ
あく義の繼、すともうと云ひ、れハ義毫ことす
不孝のむこうじ日じに坊て其テの子と日根井某と
ひ友人いぢりて殺す。義の山城入道と攻殺して
毛吹、強盛威とす。其子龍興、附赤坂信長

テ比よりの近源事に濃列故隼也の氏家
セモトとモロ碑の説大聲如比翁其莫疑焉シテアリ
シガトモク相見記の比是如其畧如凡

濃列の西守護共家、土改 源頼光後胤 其一家、遠山 加藤景
え弘建武の元後遠山衰て終に小石村と領を土改繁昌
一て一圓の守護。又當國稻葉小山 越前守利兼夏永年四月を義
始主役頼康の幕下に屬して子孫其名と承。應仁の乱
後裔藤家自立。西濃と切子ノシ。土改と並いたてアリ
ト。土改後原に威となり。守護の名のアリ。年月と
送ら。明應年中の赤藤 持是院 基後守赤藤御而守利兼子
ニ佐法印妙橋と云 時是院 持是院赤藤り所謂妙橋妙院也

稻葉山の城守居候。武藏と隣国とゆきり其須源中の高
人松浪賀太郎 か日良原長井在高を金井所に認其名をと實テ西内所から得下 不寄濃列にあり。不寄濃列にあり。而して城橋の家
人多々アリ。多々見えり。或焉もあり。妙橋守と云。後
い改守に立候。人を移すの軍守。余アリ。アリ
當國今演の城守長井在高一家と立て。赤坂に從ひ。文
一と松收謀密。而て長井と退去。便其後とひて今演
の城主となり。自葬太郎。而て秀元と改称。モ後持是院
元治元年二月廿一日不比號也。曾子ハ赤坂新守利國
死れ也。と男より。リカハ家中別くにうりて。而そのと
遠ら。アリ。秀元急に掉無て。一戰一拵て其副と称

一齊蘇小城守利政と名すを以て蘿跋して妙橋のま
祐一に之を名付て法仰武大内ア其弟ヤ人頃此
城主ニ先升集ノ仇ト称シモニセラテ土岐大膳
大友賴義と嫁シテ親ニ至キテ既て當國と追出
ノ後ニ一帝濃別と領セラ嫡子以知大膳義光
ニ勇毅年少ニ留連不歸先テ之の生也之を主テ是
ニ義竟と應リ久恨憤て弘治二年春遣之至將
詔乞日根也御中也弘乾と云家人は今して才
云々殺害之遁之大思テ義竟と討テ差引

やくやくみ義毫印て逐寄に稻葉の城を拝みて父と見
内年正月二十日鷺山にて父子合戦せし道三打まけ
敗軍せしもレ牧源入と有終に通之首と火弓の
手より義毫濃川の手後と称して暴風とゆきの永禄
六年に病死せりとて義毫子義宣城田俊政を承れり
凡近世或家の行記に矢張りとよゆきと云ひて秋
東照神社君所ゆきは七十年前までへうるゝ事
又室一十五歳にしてとて家の多故退々として一時之
きよのとく身をさめ、前ゆゑがれに死んで遠國の

秀吉檢地又除元年尾張國五十七萬一千七百二十七石

○役朝鮮兵士一千五百人

遣内大臣平信雄

常真

兵士一千九百人

武藏大納言

内藤

惣兵三千六百人

名古屋在陳十萬三千三百人

渡海軍勢二万一千二百人

○竹腰道珍濃列裔廉之家人也道之父子號の附道之よ

討
二謂

或ハ侍ニ道珍ハ佐々木の一流初、竹腰助は正助と称し

土岐頼慶の臣より通之濃列と有て後仕其頃金森

某の子原氏基甚ひつ正義行所勘解由某のことを名の竹腰助へ序と称す

安爰氏没後の後淳家小佐一故方へは山陽の圓

志水み義君せうじ竹腰山城守正信入り一或人曰竹腰
道珍一佐々木の忠虎一佐々木廉之和語通之廉と越
句と子意とて初ハ竹腰と称一或人曰道珍濃列
竹腰村の人々とソク是を事と云う

○三国淨業列祖

釋迦牟尼如來

一弥勒慈尊ト阿難尊者ト舍利弗尊者

文殊菩薩

馬鳴菩薩

龍樹菩薩

天親菩薩

以上天空

唐王況
佛圖澄
善提流支
義淨
惠同
惠遠
道安
惠寵
道場
雲鸞

大海
法上

道綽
善導

兼遠
法照
少康
智寬

省常
宗頤

唐漪流自此出

以上農旦

空也
良忍
法明
融通念佛祖

天竺自此分三

源信
源空
自此分三
諸流

以上同本

圓頓大戒
相兼

天台正流

本師寂迦大師

龍樹尊者

天竺

因悟大師
北齊童容
止觀大師
南生

靈惠大師

總持大師

童容

因達大師

南生

全真大師

明寬大師

日本

因道大師

南生

興道大師

傳教大師

日本

慈寬大師

南生

長意闍梨

慈念僧正

慈忍僧正

源信僧都

俗觀

道所

佛教

遊觀

隆寬

多念義
長樂寺

重源

未寺
大勸進

信空

白川

正信

議峨

勢觀

智恩院
二也

敬曰

慈信

能念

信樂

隆慶

能念

智慶

信空

信寂

朝日山
九華寺諸行

長西

本願義
安居院

聖覓

安居院
慈義

幸西

慈義
安居院

正定

明信

入真

善性

勸信

善性

證忍

如輪

理圓

覺心

寬阿

空寂

十地

道教

戎圓

上教

戎圓

綽空

本願寺祖之有佛光寺惠心等
錦織寺等諸流是親寧

阿弥陀坊

禪信

因頓戎弟子附法曰部泉等

了敏

○尾張川九瀨

大炊ノ渡

鴉沼渡

板橋渡

氣瀨渡

壹途渡

食イ渡

桿鳴ノ渡

黒保渡

市川渡

是ハ古人尾別ノ名渡渡リ

堺

豆達

濃河渡

大豆達と赤渡との稱也

平源

とひ野

大榮濃河渡

定ノ年ぬも食ハ

即喰

やれりの里

大原里

○慶長二年元和元年也正月廿一大津町至度山此陳宮は少佐加賀丸

甲斐守至高松鳥工渡形於之御して夜旦之間あらず渡

御陳宮は人情ありてあんむきを改めに久津次してあく
かへて身やと佐ありて行は御陳宮は兵成左近也
みれ常とあたしよめぬれ、長ち漏して私より陳宮
と四後生と詰せり、久々復の勅方寄おは被恩也御感
うりやうて石舟を傍と呂て方後の城へ第、秀賴
死せとてそけ跡えす、と今て多々の刻も
中入して方のと窓よぬ居中の留侍とて腰脇み
斗目と弟豊前守とて一段早う而まて水と汲者行ひ
きてつゝ貴方あれ、が車あり御おもて御所うち内廻アマニ

安事多有りて不輕其事かとぞ思ひ入り入セりめ
うきの内府より桂院へいよや准より附まつて居らる
ゆくと聞ふ被ふ束之内侍奉にて在御院東殿甲殿うへと
也度一月も少く御の者と傳ふ内府のりびへりす
山室丸の通ひ年食とやの事と井伊攝政从一平を奉
く圍てありあへ井伊氏よを経のちよのて也度の事
あるまゝやと同井伊氏云内府と紀別らる山へはれ
つすくよすのは大所所令事と下すとあく
謡を梅戸忠助行村
市正僕とおもと供ふ土産前より逸水

あそとひちをきて右のぬと聲一人馬の数是下のいかし
と少しで甚用と歸らんといひ。大野、朽葉の廢斗田と
先一たの根はよかず又て血流が速冰ハ猶夢の廢斗
田と先一白井巻とぞう何と軍需と帶せざりし大野
金とねには多く神戸及婦人等の運の便小山萬葉主
其代人馬何ぞ十才不到と養多日せば多め多ハア達
調とまん申あらうと有司まで送り下すと化かれて井
ほのよきてありとて井伊氏少て差轉つて承命
教ひうきとて一時をすとあくとて忽ち詔炮とけ

て、もじにひく、レキセイ、がさりそて、娘ありて、娘ち
ぬるままで、娘八百の、娘別よ、茶席と、えりて、おほのあ
うと、娘や、くら威不釋して、男速山陳と、おなじて
ひかるあく、く、間を、差し候は、度よ、まく、
か、蟹爪氏郎、易、云門、説可入、ゆめ、す、あく、
ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、夜四つ、すまう、り、あく、
ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、
ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、
感、一、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、

○種村肖推寺人種村一ノ木
村靈之神に寫べ佈てよ
ひ、當面竹院亮のちおう常因せひて後蘿媛せし焉
利家是れ我意よ仕シテアリシテ中それ也モ共ちうし
種村琵琶の上アマのりアマ利家自雲シテアマ琵琶アマハタと云
す也今ヨ彼家は何んアマ書と汝アマよ人比眼アマ近セアマま

南都東今守の蘭奢待香

木口一天元守

長サカ尺二寸八分
重サニ實五百九十五

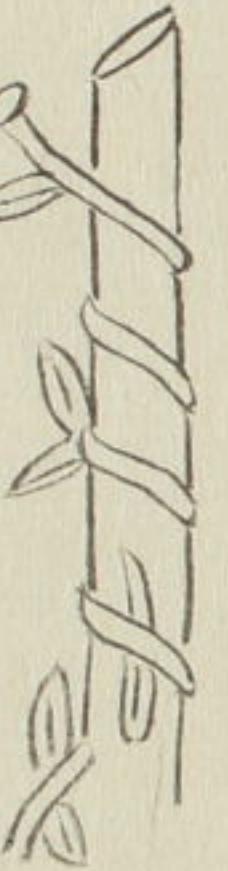
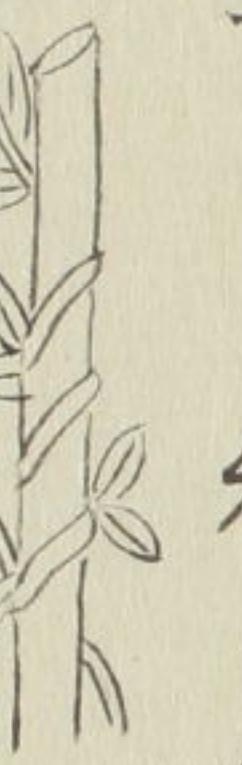
身し來照宮の在世有司不以爲名見
江川等子時名あじとう

一
私帆沖帆頃吉ナ席
兼紀其まひ人乗去ル申ニ月廿四江戸
出船は波也向也下田入港は
御番所ウ政とうけ内示
云帆は伊リク子浦の
冲モ難风よ合冲へ吹かれ帆柱
切折流作也、海、浪風強帆折安ナ方、吹きくすれ行國も浦
着帆不候永く冲方よ死スノ外候本丸也、そりだれ也、了
為め舟も多々二十一張其外干鶴也、うるる嘆めよは年年
つあす、居浦は天氣水ハ雨也やハ風也の水又候、御所
當面、今日サ、船もぬれ不あス、力も弱也、手と脚也
上手下手とも、ちくあ、破れて、あかて、上手下手才、跡叶
ひれ十所斗、冲外者もよび、よろやかの人を運びテ、山原お見
え、あれつぐて候、名前アシ如セスヘの者一人、事アシテ、ヤ
タリトモ、一筋通、ナシトれ、方々助くれ、候どおれ、
そも、トモ、一筋通、ナシトれ、方々助くれ、候どおれ、
札と、アシテ、りて、形也、もともと、しの、奥、つり、系アシテ、古也所
斗、あり、クハ、穴と、あ、上と、あ、の、四、と、か、て、四、アシテ、古也所
ソシテ、うりて、キモチ、モ、生アシテ、古也所、よ、あ、ん、今、内、古、右、
族の、よ、後、く、古、今、入、ナ、い、む、敷、れ、一切、望、アシテ、ア、と、せ、い、
セ、絲、織、然、か、し、費、也、在、ナ、モ、モ、ク、ナ、ニ、ラ、リ、ヒ、ク、年、と

つあを下すひかほと反往門尺よりハ右も若丸本のうち失とへ矣
をもとと云ひては裏名と云ふらむの中よほど又よ
育多リもとあすことヤ而本名は室ヤとわくとテヨ
かく妙なね高橋ワ筋内高承承也モ也とヤ夫そびきよ
テ所居店ヤトヒ中守内承承也モ也とヤ夫そびきよ
あさと延多仕内大行寺御寺ノキノ高承承也とヤ承
延多仕内月テ方ひりくツバカ承承也とヤ高承一高
内大行寺ノキノ承承也とヤ高承一高
石の承承也と承承也とヤ内大行寺御寺ノキノ承
系名の承承也と承承也とヤ内大行寺御寺ノキノ承
あらう承承也とヤ承承也とヤ承承也とヤ承
一高仕内大行寺御寺ノキノ承承也とヤ承
高承一高仕内大行寺御寺ノキノ承承也とヤ承
所内承承也とヤ高承一高仕内大行寺御寺ノキノ承
多モの承の承一高仕内大行寺御寺ノキノ承承也とヤ承
一高仕内大行寺御寺ノキノ承承也とヤ承
高承一高仕内大行寺御寺ノキノ承承也とヤ承
所内承承也とヤ高承一高仕内大行寺御寺ノキノ承
多モの承の承一高仕内大行寺御寺ノキノ承承也とヤ承
一高仕内大行寺御寺ノキノ承承也とヤ承
高承一高仕内大行寺御寺ノキノ承承也とヤ承

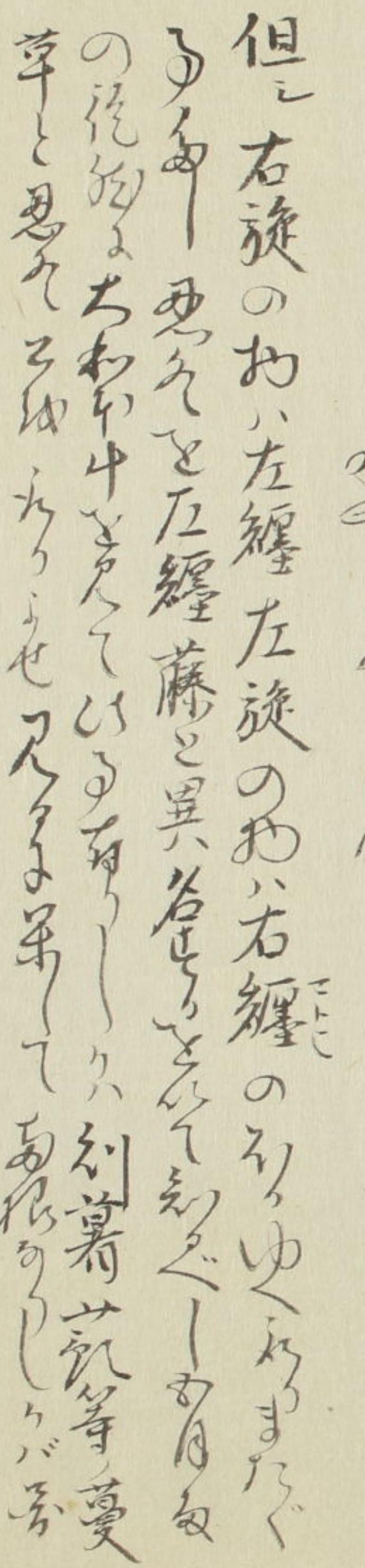
あやめ町

ちへお西へりは月を承る所、豈田助考の方
あふる、わが身仕しに書き足之



。凡蔓草ハ天乃在旋也。氣順ウ也。比皆左旋
有之。又左巳。○如此右也。ハ三ツノ帝也。
人多之。ナニテ。モ。蔓叶^{スルアリ}。サ。叶^{ササガリ}。物に纏^{スル}。シ。と俗^{スル}。也。

但し恐久々カリ諸ナキテ
右號ナリ



皇帝院經調綠也大敍高麗へり。親王大臣用之此下更不可用。公卿小敍高麗綠。宿侍黃綠也。四品位雲客用紫綠。海人藻客下同。今神家僧侶之タリニ大小敍高麗。シ用其備甚哉。

古今傳授

定家為家為氏為也。頻阿經賢。竟尋
竟惠。竟孝常綠。宗祇實隆。公條實證。
玄旨知仁親王通勝中院。後水尾院。大上皇。
光廣鳥丸

父竟孝より竟憲僧都に傳下。一傳宗祇より
宗長及牡丹院に傳下。二流称名院公條より
九條樞道と紹巳と傳り。九條より而下
光友。沙鷗。多才。時子。多才。少翁。少翁
才。少翁。道。少翁。才。少翁。
江國院三品羽林郎西巖諱周織田諱正宗也
天德院一品前右相府奉巖諱安信長也
熱田龜井山圓福寺。有此位牌。

。淨土宗ハ承五に源空立テ一宗立シハリトニ
ヒキモテアム流ハル（及ニ鎮西の聖光ノ流）
天台の血脉と傳へて円頓戒と授け伊モ血脉
達とスルトシ

本師叙迦牟尼如來

南岳惠思大師

天台智者大師

章安灌頂大師

智嚴大師

惠嚴大師

玄詮大師

妙樂大師

道邃和尚

慈覺大師

長意和尚

日本傳教大師

慈忍僧正

源信僧都

禪仁阿闍梨

良忍上人

叡空上人

元祐圓光大師

聖巖上人

記主禪師代々

くのくく斗て封て仰 西山の善惠^ヲ流ハ
いとよ念佛の初師と云序て仰テ血縁
に流れ上に一大圈とす 南無阿弥陀とナシあり
書ナシトシ

登遣 教主叙迦久佛

普賢菩薩

文殊菩薩

来迎 提取阿彌陀佛

彌勒菩薩

阿難尊者

馬鳴菩薩

身子尊者

證明護念六方諸佛

竜樹菩薩 天親菩薩 善導大師

菩提流支三藏

法懶禪師

少康法師

曇鸞大師

道綽禪師

懷感禪師

源信僧都

回光大師

證空上人善惠也

淨音上人代々

ひより 沢 知流 白旗

名越 斎田一条二条

少幡のち流ありとぞ 芳知恩院と妙心寺とぞ
西山派西谷八幡の二流ハ東山禪林寺西山光明寺と
むすとて本山派ハ洛誓願寺むらさく深牛派の
寺ハ絶一と迦比真言寺とぞり立て一流のむ寺と
もと洛誓願寺退去の地く山外多流一二小河源
本願寺の血脉ハ七祖と立

龍樹 天親 昙鸞 道綽 善導 聰信 證空

右或汝坊ゆく見へりナテ此れ

○尾候引丙の内幕及い白旗傳へさせたりよこれ
慶長十九年正月駿府にて 教公に授けられ

○唐發ラノスビキ也戰國策ニ見ヘタリ

○元禄十五年二月

大樹御母堂 桂昌院尼公御位陞勅許

從一位藤原光子

勅使

院使

宣命使

固身

地下二人

青木縫殿

醍醐權中納言藤原昭尹
東園寧相藤原基長
石井少納言平ノ行康
土御門三位安部泰福

小ウサ内記

○尾列 中嶋郡 清洲城主 斯波氏

斯波尾張守源家氏

家氏曾孫也

斯波尾張守源高經

家氏曾孫也

從三位右衛門督源義將号法華寺殿

正三位右衛門督源義童号與德寺殿

正三位治部大輔源義淳号心照寺殿

從三位右衛門督源義敏号武衛家

義淳曾孫自是任右衛門府

我敬以來仕右兵衛督者絕斯波之意故

○尾張三位中將忠吉卿の小字を福松君

移也

○芙蓉香方

錢十五

沉香

二兩

檀香

一兩

片連

三錢

水臘

三錢

合油

五錢

生結香

一束

桃子

五錢

芸香

一束

耳麻然

五分

唵叭

二分

丁香

二分

郎台

二分

藿香

二分

寒陵香

一分

乳香

一分

三奈

一分

撒醋菊

一分

櫻油

一分

榆麵

八錢

硝

一束

右二十

香和印或散燒

天和朝鮮人來朝の時 我之獻一土
產の中より芙蓉香有りとさへれども
そく行ひしがけ方也

○泉列坡北た皇子が飢うひあひ北の辺に首截地
藏くら之呼石像いしぞうあり 東海ひがしうみに少すくなめの西にしうらにても首截

石の自破じはたとりりしもや

○德音寺殿義山宣公

木曾義仲の法名ほうめいアリ其塚、江而西采津さいづアリ
今義仲寺ぎちゅうじアリ天台宗の僧守そうしゆアリ共香火
の場ハ信列木曾宮越きぬわアリ日照山德音寺とくおんじアリて臨
渙汎けんげんの寺てらアリ由干村氏の家系いえけいにつく行ゆきし

○配閔胞前相公細重卿きよなの御墓ごぼと増上請寺ぞうじょうじの後の山に

近ちかいまつせうれす。 大納言家君いえのの実考じみこうす

延宝六年九月十四日薨ス葬ス傳延院トヨニ号ス清揚院

曰譽天安永和大居士ト

又先妣長福院夫人の御牌子淺草の幸竜寺日蓮
いあやトと寛永寺トに近座アリたまひをとくや

○林佐渡守越智信勝依平贈相國之命一監以尾列

那ち野城ノ後有故篭居ト和列梶折村ト而卒ト号ス
養林寺殿矣雄玄親居士ト千賀氏某者本林氏ト
仍於尾列ト建玄規之寺や場ト其氏族僧尼長
為開基祖カイキ豈長始ト信京師知恩寺ト賜紫衣僧也

稻葉越智宿城主称後高田林通村之裔也
尾府下林氏多其族也

○熱田湊 常夜灯

尾張國吉陽市郡

件灯臺者為使往来之船一百使千夜渡也是
即依千亡文成瀨隼人正藤原正成遺命而正
房所營建也并寄五十畝之田城於大子堂以
為膏油之資矣所冀至三十万成無斲
施矣

○銘曰

桃一ヲ点灯

地斗南針

致万人利
却在第ニ

寛永二十七歲曆月十七日

洛下杏菴

○武家大橋氏は三流あり一流平真常の裔へすて尾
羽津治の住うり一流は宗良親王の孫良王君の孫よ
りて源氏うりそし津治の住人なり
大橋中務太輔源定廣此女蜂須賀正利の室く大永
利政と生田寛永系圖見ヘタリ
流ハ近江侍なり

林駿河守通政

林宗兵衛正三

母大橋清兵衛童長女実ハ妹也
林佐渡守通勝ノ養子

林内通正成

稻葉丹後守 正利

母春日局惟任日向守
奇藤内藏助政治母也

稻葉義濃守 正則

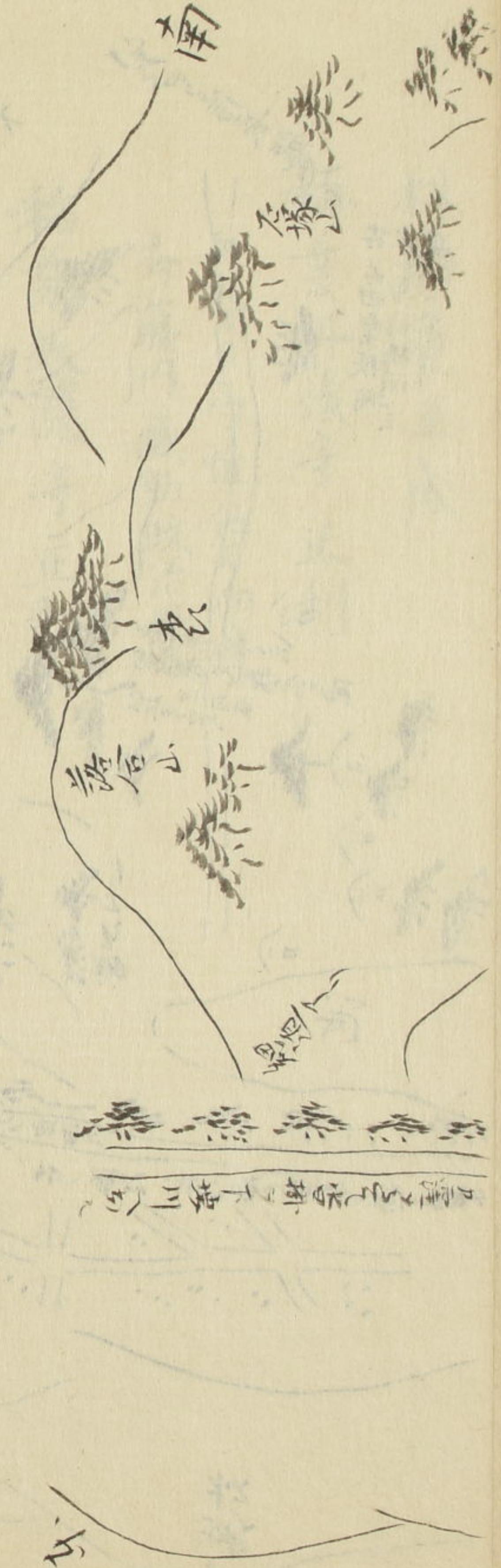
○问、十香或十種香 之何集了。香也。
答、印海之梅也。小

梅檀 鮑羅也 沉水 穢合 薰蘿

白鵬 青木木香 零陵 耳松

鷄舌 丁香也





○故從四位下行治部ノ大輔兼駿河守源ノ朝臣義元
父・増善寺修理・大夫氏親・朝臣母・中ノ御門前・權大納言
藤原・宣胤卿ノ女

永禄三年庚甲五月十九日横死ニテ天澤寺殿ト秀峰哲云
○桶狭間村の少屋形挾間忍・所謂田樂ア瀧の道程
丹家一里余数善正寺へ二十七丁余庚中嶋二丁町余庚
鳴海二十三町余庚有松八丁中村へ一里半余庚九根二重書
鷺津二里半斗酉大高へ一里半斗酉水懸一里斗酉
桶狭間ノ局大小同異アシカ一例アシカとアシカ又アシカ
又アシカノ小者又造りてにあらずの

○名古屋合戦記

後相原院ノ御宇駿河ノ屋形今川修理ノ大夫氏
親尾張守護斯波治部大浦義達ト互ニ敵シ
テ合戦ニ及ブ其比三河国卧蝶ノ地頭大河内
備中ノ守矢綱ト云シハ元来吉良歟ノ家人也
近年自立シテ咸シ振ニ國中ノ兵士ヲ懷ケ
テ駿河領ヲ窺今川殿兵ヲ以テ討之^レ下為給
ヘリ大河内尾列ヘ礼ヲアツクシテ斯波殿
ノ援シ^{シテ}請ヘリ義達諾シテ從^シ之大河内々遠
江國引馬ノ城ニ柵籠リテ種々ノ謀畧^シ企

ソ今川殿是シ退治セントテ永正十年三月
一万余ノ軍兵ヲ卒ニテ遠列ヘ發向斯波殿
ハ深糸ノ城ニ出張ニテ軍評定アリシ今川
殿ノ家臣朝比奈十郎奉以夜シ侵テ襲之シ
カバ尾羽勢敗北シテ奥山ヘ退キ遁ル同十
一年三月大河内軍テ引間ヲ取^シ返^シ池田入
野邊ヲ押領シテ却^テ威強盛ニナリニキ又^シ斯
波殿ノ出馬ヲ請ヒケレハ義達再進發アリ
清須ノ城ニハ織田大和守敏信ヲ留守トレ

給ヘリサレトモ織田伊勢守信安遠列進發
ノ事ヲ止ニ義達許容ナカリシ力ハ不和
ノ事出来テ上四郡ノ兵ハ參陳セサリシ故
斯波家ノ軍無勢ナリシ然レニ大河内ヲ援
テ引間ノ篠城ト聞ヘシ同年六月今川殿三
万ノ兵ヲ卒シ城ヲ取ツ卷テ攻撃シケレバ同
年八月十九日終ニ落城シ大河内久綱并ニ
其弟臣海新左衛門尉道綱高橋三郎兵衛尉
正定中山監物等千余人討死セリ斯波殿ハ

降人トナリ普濟寺ト云禪院ニ入ッ剃髪シ給
ヒケレバ一家ノ好ニニ余ヲ助マヒラセ尾
列ヘ送リ還サレケル北ノ時向後駿河屋敷ニ
對シテ引カラザル由起請文ヲ留メテ飯
国アリケル依テ今川殿其末子尤馬助氏豊
ヲ指添テ尾張ヘ指上セ終ヘリ義達ハ既ニ
隠居アリシカハ若君ヲ織田大和守以下補
仇シテ武衛ノ家ヲ相續ス是治部大輔義統
ナリ大永ノ初今川殿ヨリ尾列名古屋ノ城

ヲ築た馬助ヲ移レ入テ清須ノ押ニセラル
義統ノ妹尼馬助ニ嫁シケル上ハ東西隔ク
ク中々靜ナリケル其比勝幡城主織田彈正
忠信秀トテ清須三奉行一人アリ尼馬助ト
毎ニ親ニ互ニ連歌ヲ好マレニカバ勺ソ付
アヒテ名古屋清須ヨリ使シ馳テ遊バル扇
箱ナトニ懷紙ヲ入テ持アリキケル力有時
洪水ノ折柄使者小田井ノ川辺ヲ渡リケル
トテ彼箱ヲ流レ失ニケル左馬ノ助本意ナキ

事ニ思ハレケレバ彈正忠ニ申贈ラレケル
ハ道ノ程近カラザレバ付相ソ侍カ子侍ル
殊ニ先ノ如ク懷紙十ド失ヒ候事モアリ願
八十日計モ名古屋ニ留レヨ心靜ニ連歌シ
候ジト申サレケレバ彈正甚悦其ノ後ハ名古
屋ヘ往城中ニ一ト間ヲ預リ或ハ立三日又ハ
十日餘モ滞留シテ連歌シ茶湯シナドセ
ラレケル亨禄立年ノ春例ノ如ク名古屋ヘ
來リ數日留リ居ラレニカ木丸ニ向ニ窓ヲ

切開カル今川ノ家人怪テ御館ニ客人トシ
テ在ナガラ矢挾間シ切ルコソ心得子トテ
其様シ申ケレトモ左馬助事トモセズ此人
ニカキリ別心有ルベキトモ覓ヘス風流ノ
仁ナレバ大木ニ霞ヒタル柳ノ丸ノ挾サニ
夏ノ凡ノ便クヨウナドニ窓シコソ開カルラメト
テ更ニトガメラレサリケリ黙ニ所ニ彈正
俄ニ大病請ラレトテ彼ノ家人走リ回り清須
ニ告ケ勝幡ヘ申シクリケルホトニ三月十

一日其親族家人多来テヒレメ夕夜ニ入テ
猶家人来リ重クリシガ今市場ノ方ニ火事有
リトテ城中サワギ立ケル折節南凡ハゲン
ク若宮ノ社天王ノ社シ始ム天永寺寳養寺等
ニ火カ、リテ城ヘ火ノ子ツ吹付タリシガ城
ノ東南ノ方ヨリ時シ作リテ攻ヨスルホドコ
ソアレ柳丸ノ方ニ時ノ声シ合テ火シ放勝
幡ノ兵士甲冑シヨロニ本丸シ攻ケル間城
ノ中ニハハカバカシキ士卒モナク内外ノ

敵ニ包レアキレサハギケル廣ハキ竹嶋等ニ
在リケル今川ノ家人初ハ火事ノ為ニ集リ
タレバ物ノ具シタル者一人モナリ襲兵ハ
爰彼ヨリ馳出テ追ツメテレハ何モ素^{スバダ}膏
皆討レケリた馬助ハトカクシテ城シマキレ
イデ茶師寺欣部亟シ以テ余ハカウシ請得
テ女方ノ縁シ便ニシ京都へ上ボラレケル彈正忠
ハ計畧思ヒノマニ為スミ名古屋城シ取リ頓テ

移リ入ラレケル清須ニモ内々今川我國ニ來住
ノ事口惜ク思ニ給ニシカハ知スカホニテ過ラレ
ケルト聞ヘシ天文三年ノ正月信長此城ニ誕
生アル御女儀ハ土田氏ノ女也同四年同郡古
渡村ニ新城シ築テ碑正忠移ツル若君ハ
猶名古屋ノ城ニテ成長アリケル同廿五年七月十二日織田彦忠而信友斯波殿ヲ
殺セウ翌年弘治ト改元アル四月二十日
信長矣シ卒ニ清須ヲ攻信友誅ニ伏又是

ヨリ 信長清須ノ城ニ移リ 名古屋ノ城ヲ
ハ叔父孫三郎信光ニ授ラレシニ其年
十一月二十六日坂井孫八郎カ為ニ弑
セラル故ニ林佐渡ノ守信勝シテ城ヲ
監セしメ給ニケリ

○織田信雄ヲ世ニノブラト讀ニハ初信意と名詣
故信雄ニ改られ後モノブシトエーノブカラト
讀ムヘキト古記よりスルト同官權入定云々或ハ
北畠權中納言具教卿の實子信意とエーハ人
別モアリヒツクノ説ハ非也信意信雄一人兩名也信雄北畠

の養子書トエーナハ具豊ニ称セ具教の實子也
北畠系圖寛永十八年御撰に具教卿の實子にも兄弟但一翁家傳
別小信意ノ人也トエーナハに具教の子
信意改信雅其子親頭度長八年に生と記セ

○宋 塩農鉄トウホに及くウツホの二字と一字に
アラタニ 築トウホ書トウホに毛竹をも及矢賦トミツ
小竹をも及筑也トウホ也トウホ也

This image shows a fossilized pterosaur wing membrane, specifically the primary and secondary flight feathers. The specimen is oriented horizontally, displaying a large, triangular central sacrum and two long, slender, slightly curved metacarpals. Each metacarpal is supported by a series of elongated phalanges, which are visible as small, irregular segments. The overall shape is highly elongated and pointed at both ends.

